

ダルマキールティの概念論

櫻 井 良 彦

序. Śāntarakṣita (725-788) と Kamalaśīla (740-795) は、他者の排除 (anyāpoha) を相対否定 (paryudāsa) と絶対否定 (prasajyapratishedha) に区別し、前者を概念知の表象 (影像) 上のものと異類から排除された独自相上のものとの二つのレベルに分類する (TS, 1003, p. 390.6-7)¹⁾。他者の排除を二つのレベルに分類する考えは、既に Śākyabuddhi (660-720) にある。

「それ」という語は「他者の排除」に関係付けられる。それ (他者の排除) も又、二様である。即ち、他者から排除された独自相とそれ (独自相) を知覚することによってもたらされる概念知に顕現した表象とである。 (PVT ad PV I 110c2d & PVSV, D. 127a7-127b1.) 本稿は、Dharmakīrti (600-660) の概念論²⁾ に於ける他者の排除の二つのレベルを論じ、後代の学匠達に於ける他者の排除の二つのレベルの分類との同質性を論ずる³⁾。

1. 概念知の表象レベルの他者の排除 Dharmakīrti は、概念知や語の対象、意味内容としての概念が、他者の排除と特徴付けられる概念知の表象であることを、

それら知に存在している諸対象 (表象) は、[異類からの] 排除を本質する故に、異ならないものであるかの如くに顕現する。 (PVI 78abc, p. 44.19-20)

と述べる。Dharmakīrti は、概念知に現れる同一表象が他者の排除 (異なり) を本質とするものであると考えている。この記述を承けて、Śākyabuddhi は、他者の排除を概念知に顕現する表象と述べ、Śāntarakṣita も同様に分類したのは明白である。

2. 实在レベルの他者の排除 实在 (独自相) レベルの他者の排除に関して、Dharmakīrti は言語協約とそれに基づく人間の行動の視点から以下の様に述べる。

作用を異にしない諸存在を、その同じ作用を持たない物と別異の物と知って後、それ (同じ作用を持たない物) を捨てることによって、[人が同じ作用を持つ物に] 行動するだろうと [考えて]、それ (相互の異なり) を知らしめる為に協約が為される。この相互の異なりが、同一なる顕現を有する、迷乱したこの概念知の因である。 (PVSV, p. 40.17-20)

或る諸实在が、同一の効果的作用 (e. g. 同一概念知) を本質上生ずる場合、その

諸実在は同一の効果的作用を持つという点で、その同じ効果的作用を持たない物からの排除を持つ。或る実在が異類から排除されているというのは、或る同一の効果的作用を為すか為さないかという観点から言われる。言語協約はその諸実在間の他者の排除（相互の異なり）を知らせる為に定められる。実在に於ける他者の排除は、効果的作用能力に基づいていると Dharmakīrti は考える。

〔排除が〕諸実在に存在する。それ故に、実在に関する語はそれ（排除）を根拠としている。外界の物の能力に基づく排除を〔直接的に〕根拠（対象）とすることはないけれども、かの語は、それ（排除）を〔間接的に〕根拠とする、概念知にある影像に結びつけられる。（PV III 163c-164, pp. 259-264）

Śākyabuddhi は、独自相に於ける他者の排除を、PV III-163c の「外界の物の能力に基づく排除（bāhyaśaktivyavaccheda）」への注釈で、「外界の物、つまり独自相の甲という結果を持つ物と甲という結果を持たない物の各々に限定された能力なるもの、それ（能力）に基づく独自相の自体である排除、それ（排除）が、外界の物の能力に基づく排除である。（D. 190a7-190b1.）」⁴⁾と説明する。又、Śāntaraksita が分類する独自相に於ける他者の排除は、Kamalaśīla の注釈によれば、「異類のものからの排除」である⁵⁾。とすれば、これは独自相に於けるものである故、Śākyabuddhi と同様に解するのが自然である。

arthakriyāśakti に、日常的言語活動での「効果的作用能力」と、知覚及び瞬間での「因果効力」との両義があることは先学により夙に論じられている⁶⁾。上述の独自相に於ける他者の排除は前者に基づく。故に、独自相に於いて言及されると言っても、或る効果的作用を持つか持たないかという仕方では、異類からの排除という様に一定の同一性が付与される。

又 Dharmakīrti は「全ての存在（独自相）は、本質的に各々の本質に確定されている故に、同類からと異類からとの排除を有する（PV I 40, p. 24.18-19.）」と、概念知が関わる前の実在（独自相）の様相を語る際、vyāvṛtti（排除＝異なり）という語を以って説明する。この場合、排除は、諸存在の各々の本質（svabhāva）、即ち知覚及び瞬間レベルの因果効力に基づく為に、同類と異類との全てのものからの排除の意味となる⁷⁾。因果効力と効果的作用能力は同じ独自相の持つ二側面である⁸⁾。故に、効果的作用能力に基づく他者の排除と因果効力に基づく他者の排除も又同様である。Śākyabuddhi も、先に引用した様に他者から排除された独自相を知覚の対象と述べている。行動の対象という視点から観た場合、同類と異類との自己以外の一切からの排除と理解される。Kamalaśīla も「異類から排除された独自

相」, その同じ独自相を「同類と異類とから排除された独自相」と注釈する (TSP, p. 394.21).

この実在レヴェルの他者の排除に関しても, Dharmakīrti と Śākyabuddhi と Śāntarakṣita 及び Kamalaśīla との間に見解の相違はない.

略号 ①PV I 及び PVS V : *Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti, the First Chapter with Auto-commentary*, R. Gnoli, 1960. ②PV III : 戸崎宏正『仏教認識論の研究』上 1979. ③PVT (S) : *Pramāṇavārttikaṭikā*, by Śākyabuddhi, Derge Edition 4220. ④TS (P) : *Tattvasamgraha of Ācārya Śāntarakṣita with the commentary Pañjikā of Shri Kamalaśīla*, Voll, Shastri, Bauddha Bharati Series 2, 1968.

1) Dreyfus, *Recognizing Reality, Dharmakīrti's Philosophy and Its Tibetan Interpretations* 1997, pp. 234-239 を参照. 2) 赤松明彦「ダルマキールティのアポーハ論」『哲学研究』540, 1980 を参照. 3) Dreyfus 前掲書 pp. 235-239 に於ける解釈は, 筆者と異なる. 4) Ravigupta (9世紀初頭) は, 「外界の物にある他ならぬかの同一の結果を為す能力が排除の根拠である (*Pramāṇavārttikaṭikā* by Ravigupta, Derge Edition 4225. 68b5)」と注釈する. 5) TSP, p. 390.17, p. 392.8-9. 6) M. Nagatomi, *Arthakriyā*, *Adyar Library Bulletin*, 31-32, 1967-68. 神子上恵生「物にそなわる普遍的機能 (Sāmānyā Śakti) と特殊的功能 (Pratiniyatā Śakti)」『龍谷大学佛教文化研究所紀要』17, 1978. 桂紹隆「ダルマキールティの因果論」『南都仏教』50, 1980. 7) 船山徹「ダルマキールティの「本質」論—bhāva と svabhāva—」『南都仏教』63, 1989, p. 6 を参照. 又, 知覚レヴェルの独自相に於ける他者の排除に就いては, 谷貞志「ダルマキールティ「SVALAKṢAṆA」(独自相)の問題—自己差異化する現前不在の対象—」『インド学密教学研究—宮坂宥勝博士古稀記念論文集—』1993 を参照. 8) 桂前掲書, pp. 97-100 を参照.

〈キーワード〉 anyāpoha, Dharmakīrti, Śākyabuddhi, Śāntarakṣita, Kamalaśīla.

(龍谷大学大学院)